# はじめに

国際日本文化研究センターの第10回国際シンポジウム「歴史における理想郷――東と西」は、1995年10月2日（月）から5日（木）まで、4日間にわたって、京都桂坂の同センターで催された。研究発表をした者は、二人の基調講演者、芳賀徹（日文研）とジェラルド・ギレスピー（スタンフォード大）を入れて、計18名（8セッション）、各セッションごとの座長や討論者また傍聴者を加えれば、総勢約40名が常時出席して、きわめて活発な討議が行われ、出席者はそれぞれにあらためてこの問題の面白さと重要さを知ることができた。

本シンポジウム開催にあたっての「趣意」にすでに述べられたように、人間は遠い昔から、東でも西でも、南でも北でも、つねに眼前の現実とは異なるよりよい理想の世界をいずこかに想いえがいては、いつかはそこに到達するか、それを地上に実現するかを願いつづけてきた。理想郷という想像の空間をいとなむことがすなわち人間であることの証し、とでもいうかのように、どの民族もそれをそれぞれの神話に、説話に、宗教的信仰に、詩や小説に、また哲学や政治論に託して語って倦むことがなかった。今回のシンポジウムでも、プラトンにまでさかのぼることはなかったが、古代人が海や山のかなたに希求した「常世」の世界から、陶淵明以来の東アジア人の理想郷たる「桃花源」や、トマス・モア以来の西ヨーロッパ人が繰返し説きつづけた「ユートピア」にいたるまで、東西の「願望空間」(Wunschraum) の諸形態は、それぞれの想像の細部の面白さまで含めて幾たびも論じられ、明らかにされた。

そのなかでも「ユートピア」の思想は、19世紀半ば以来、社会主義のイデオロギーと結びつき、20世紀にはついにソヴィエト連邦として実現したかに見えた。イスラエルにおける「キブツ」の運動も、ブラジルの新首都ブラジリアの建設も、同じ「ユートピア」思想の村落共同体としての、あるいは合理的人工都市としての、果敢な実験であると考えられて、全世界の注目を浴びた。だが、20世紀末におけるソ連邦、および旧ソ連圏社会主義国家体制の瓦解は、人々の心を震憾させた。トマス・モア、トマソ・カンパネルラ以来、論じつづけられ、試みつづけられてきた合理主義的・功利主義的・管理主義的都市国家「ユートピア」の夢は、21世紀にはもはやとうてい復活も通用もしえないのではなかろうか。といって「桃源郷」も、近代になって「ユートピア」に見とれている間に、あまりにも遠い過去の夢想となってしまったのではなかろうか。

21世紀に向かって、人間はすでに理想郷を夢みる力さえ失ってしまっているのではなかろうか。この深刻な危機に際して、私たちはこのシンポジウムで、人類の過去の理想郷への想像力のいとなみを、もう一度親密な共感をもってたどりなおしてみたのである。その夢想の歴史のなかでは、高い山々の頂きも、アイスランドも、タヒチも、「北方」も、また「満州国」さえも、それぞれにあざやかな意味をもち、あらためて私たちに訴えることが多かった。本論文集が世界各地の何百人かの思慮ある人々によって読まれ、各地それぞれの条件のもとで、21世紀の理想郷に向かっての新たな夢想の力をうながすものともなればよい、と願うのみである。

このシンポジウムの参加者一同としては、第三日目、10月4日の午後に、早川聞多助教授の

企画によって、「理想郷の現地観察」と称して西京保津川に舟を浮かべて酒をくみかわし、嵐山散策の後に天龍寺塔頭でなごやかな夕食会を催したときのほうが、ささやかながらも今後ありうべき理想郷の具体相に近づいたかのような気がした。あるいは、アメリカ、ブラジル、イスラエル、韓国、中国、カナダ、日本からの比較文学者が、同一主題のもとに参集して論じあったこのシンポジウムそのものが、すでに一つの理想郷的時間であったというべきかもしれない。

この「人間の夢」に関するシンポジウムのために、多忙ななかを世界各地から集まってくれた参会者の皆さま、またこの会議の運営と成果刊行の実務に当ってくれた日文研研究協力課の諸氏と置塩眞理さんに、主催者としてここにあらためて深い感謝の意を表する次第である。

1997年3月

国際日本文化研究センター教授

芳賀　徹